

眉目秀麗な紳士は指先に魅せられる

「六木さん、来客だつて」

その声を掛けられ、熱心にキーボードを叩いていた六木美夜子は顔を上げた。

「来客ですか？ 私に？」

美夜子が聞き返すと、マネージャの小西聡子は「そうだよ」とうなずく。

珍しいな、と美夜子は思う。ここ、ストラトフォード・エージェンシーで総務の仕事をはじめた六年、美夜子に来客があったことなんて一度もない。

「どちらさまですか？」

美夜子が聞くと、小西は首をひねりながら答えた。

「それが……日置繊維の那須川康太副社長らしいんだよね」

「ええっ！」

日置繊維といえは日本有数の繊維商社。革製品や貴金属、服飾雑貨といったアパレル製品を扱っており、ストラトフォード・エージェンシーとも関わりがある。

美夜子の勤めるこの事務所ではパーツモデルの育成や紹介、斡旋業務を行っていて、登録モデル

が日置繊維のCMに出演したり、宣材に起用されたりしたことが何度もあるのだ。

「私もまさかと思って顔を見て確認したけど、間違いなかったのよ。六木さん、那須川副社長と知り合いなの？」

「まさか。会ったことも話したこともないです。というか、顔も知らないです」
「だよねえ……」

「本当に私なんですか？ 別の人と勘違いしてませんか？」

「うん。おかしいなと思って何度も聞き直したんだけど、ストラトフォード・エージェンシー所属の六木美夜子さんって言ったから、あなたしかいないよねえ。副社長が会いに来る理由、なにか思い当たらない？」

「いえ、知り合いじゃないですし、仕事でも絡んだ記憶がないです」

「そっだよねえ。確かに日置繊維はお得意様だけど、総務は直接関係ないしなあ」

「なんなんだろう。なんの用かは言ってなかったんですか？」

「本人に直接話があるからって。六木さん、悪いけど応接室へ行って直接話してきてくれる？ お得意様だから、むげにするわけにもいかないのよ」

小西は意味深にニヤツと笑ってから続けた。

「見ればわかるけど、度肝どぎまを抜かれる級のイケメンだから。一度拜拝んでおいて損はないよ。ちよつと！ 今、ネットで調べてみたら三十五歳独身だつて！」

小西は手にしたスマートフォンをタップしながら声を上げる。

「えええつ」

「しかも、超紳士的な人だったから、危ない目に遭うこともないはず。ほらほら、早く立つて」

「わ、わかりました」

美夜子はシルクの手袋をはめ直し、立ち上がった。

美夜子も所属モデルの一人で、手のパーツモデルをしている。しかし、売れっ子と呼ぶにはほど遠く、起用されるのは年に数回のみ。パーツモデルだけではとても生活できないので、正社員としてストラトフォード・エージェンシーの総務をしている。どちらかといえば本業はそちらで、パーツモデルのほうは完全に副業だ。

それでも、パーツモデル業をあきらめたわけじゃない。いつかはそれ一本で食べていけるようになりたいと思っている。しかし、美夜子は二十八歳。加齢は皮膚の表面に表れ、歳を取れば取るほど仕事では不利になる。ハンドスキンケアやパックにお金をかけて劣化と戦いながら、事務作業でうっかり手を傷つけないよう注意して毎日を送っていた。

事務所は品川しながわシーサイドの一角に建つ高層ビルの二十三階にある。二十坪ほどのスペースをテナントとして借り、部署ごとに並べたデスクの上にノートパソコンを置いて皆、仕事をしていた。事務所の規模としては小さめで、抱えているモデルは三十名弱。社長を含めたスタッフ数名で回している。

応接室と会議室は三フロア下にある。事務所とは別に借りているのだ。美夜子は階段で応接室へ向かう。途中、踊り場にある大きな鏡で自らの服装をチェックする。

事務仕事のときはいつも目立たないグレーのパンツスーツを着ている。動きやすいし、着回しはインナーを変えるだけで楽チンだ。明るい栗色の髪を前下がりのショートボブにしたところ、同僚からは『デキる女っぽい』と好評だった。二重まぶたの目尻はシャープで、鼻は小さく唇は薄く色白で、初対面の人には『ちょっと冷たそう』とよく言われる。身長は一六五センチメートルあるので、女性にしては高めかもしれない。化粧はあまりせず、少し眉を描き足し、ベビーピンクのリップグロスを引いているだけだ。手のケアに惜しみなくお金を使う代わりに、他の優先度は下がってしまう。

美夜子は横髪を耳に掛けてジャケットの襟を正し、肩についていた一本の髪をつまんで落とした。ぐるりと一回りして背中まで確認し、鏡に向かって『よし』とうなずいてから階段を下りる。応接室のドアをノックすると、中から「どうぞ」と声がした。「失礼します」と言ってからノブを回し、中に入る。

すると、窓を背に長身の紳士が立っていた。

美夜子は言葉を失って立ち尽くす。

その紳士は、目が釘付けになってしまっただけで眉目秀麗な人だった。

身長は一八〇センチメートル以上あるだろうか。比較的背の高い美夜子も見上げるほどの長身で、肩幅はがっしりと広く、たくましい。エレガントなダークスーツを身に着け、びっくりするほど足が長く、革靴はよく磨かれ黒光りしている。スクエア型をした眼鏡はチタン製のフレームが知的で、髪は重役らしくオールバックにしてあった。外国人かと思まがうほど彫りが深く、眉は凛々し

く鼻梁は高く、キリツとした顔立ちだ。二重まぶたに、すつと切れ長の目尻は鋭く、どこか見る者をゾッとさせる冷酷な光を宿している。少し色素が薄いのか髪も瞳も暗褐色だ。眼鏡の奥の瞳は驚いたように見開かれている。

那須川康太。日置繊維の副社長、その人だった。

クール。傲慢で冷淡。完璧主義でインテリ。

那須川の氷のような視線に縛られながら、美夜子の脳裏をそんなワードがよぎっていく。日置繊維の副社長が、こんなに綺麗な人だなんて！まるで精巧に作り込まれた美麗な人形みただ。顔の造形やスタイルに、非の打ちどころがまったくない。

彼はピリピリするような緊張感をまとっていた。頭の中から爪先までデキるビジネスマンという感じで、三十五歳の他の男性に比べて圧倒的に貫禄がある。隙というものが一切なく、親しみやすさも皆無で、いいところの取締役という重厚なオーラを放っていた。

彼のつけたオードトワレが微かに香る。大人の色気を感じさせる香りに、美夜子はソワソワと落ち着かない気分になった。

二人はしばらく見つめ合ったのち、那須川のほうが先に口を開く。

「六木美夜子……さん？」

極限まで抑制された、低い美声。

「そ、そうです。私が六木ですが……」

美夜子はどうにか声を出した。

「すみません。急にお時間を取らせてしまって……」

那須川が恐縮して言うのと、張りつめていた緊張の糸がぶつっと切れる。「立ち話もなんなので、どうぞ」と美夜子がソファを勧めたところ、那須川は「失礼」と礼儀正しく言って座った。美夜子もテーブルを挟んで彼の正面に座る。テーブルには小西が出したのであるう煎茶せんぢゃの湯呑みが置かれているものの、手がつけられた形跡はない。

「突然のことで、きつと驚かれましたよね。面識のない私が訪ねてきて」

那須川は申し訳なさそうに言う。

さすがに「驚きました」とは言えず、美夜子は「いえ、大丈夫です」と小さく答えた。

「それで、あの……ご用件って？」

とりあえず、美夜子は聞く。

「その、実は、用件というのは……。あつ……と、その前に」

那須川は言って、胸ポケットから美しい所作で名刺を取り出す。

「申し遅れました。那須川康太と申します。御社と取り引きさせて頂いている日置繊維の取締役副社長です。一応」

那須川は慣れた様子で名刺を差し出した。

この人の声って、本当に耳に心地よい低音だなあ……

美夜子は感心しつつ、ポケットから名刺を取り出して交換する。

「ストラトフォード・エージェンシーの六木美夜子です。所属は総務課になります。本日は、どう

いったご用件でしょうか？」

「実は、弊社の渉外しょうがいの者に探している人がいると言ったんです。そうしたら、御社の営業に問い合わせられて、そこでマネージャーの小西さんに取り次いでくれて、六木さんのことを知ったんです」

「はあ……」

「六木さんに辿り着くまでに結構時間がかかりました」

なんだろう？ と美夜子は奇妙に思う。さつきから、どうもはぐらかされているみたいだ。

「あの、それで？ ご用件というのは……」

美夜子は同じ質問を繰り返した。

「それが、えーっとですな……少々困ったことになっていました」

那須川は歯切れ悪く言い、口を手で覆った。

「困ったことですか？ 弊社に、なにか不備があったとか……」

不安になった美夜子が問うと、那須川は慌てて否定する。

「あ、いや。まったくそんなことはないです。御社のモデルさんたちにはいつもお世話になっておりますし、宣材も大変好評で売り上げは順調に伸びていますから。クレームですとか、御社との取引に関するものでは一切ありません。困ったことというのは、少々個人的なことなんです」

「個人的？ 那須川副社長の、ですか？」

「個人的というのは語弊ごへいがあるかもしれないな。それが巡り巡って弊社の売り上げに繋がっていく

のかもしれないし……」

「ちよっとお話の要点が見えないのですが」

「そうですね。これじゃ説明になってないなど、私もわかっています。しかし、説明のできないこの状況に困っていると申しますか……」

「なにか事件が起きたということですか？　トラブルとか？」

「事件。トラブル。いや、そうじゃなくて……」

那須川は困り果てた様子で、眼鏡のツルの部分を指でつまんだ。

眼鏡がすごくよく似合っているなど、こんなときだけだと思う。眼鏡のおかげで本性が覆い隠され、表面の顔がより一層クールに見える気がした。

彼を前にすると妙に緊張し、よく見られようと気負ってしまう。こういう、馴れ合いを一切許さない、孤高の雰囲気を持つ男性には会ったことがなかった。

けど、なんかすごく疲れてるような……

よく見ると那須川の顔色は青ざめ、目の下にうっすらクマがきている。まるで戦場で戦い抜いたあと、気迫だけで立っているみたいだ。肉体はどうに限界を超えているのに、眼光鋭く気力は高く、闘志だけは燃えているような。彼の美貌には余裕がすべて削ぎ落とされた、そういう凄みがあつた。

副社長ってそんなに激務なのかなと、美夜子は呑気に思う。

那須川は頭痛を堪えるみたく目を閉じ、言葉を続けた。

「そんな風に事件とかトラブルとか、わかりやすい形で起きているなら、そのままお話ししています。説明に苦勞はしないんです。すみません、参ったな……」

参ったなど言われても困る。なにしろ、さつきから全然話が見えてこない。

那須川は目を開け、美夜子の手にはめられたシルクの手袋を見て「それ……」とつぶやいた。

「六木さんも、手のモデルを？」

「あ、はい。すみません。勤務中も不慮の怪我を防ぐために手袋をしているんです。失礼しておりますが……」

「いや、構いませんよ。弊社もビジネスパートナーですから」

パーツモデルたちは髪や足や手が命だから保護に余念がない。那須川はビジネスパートナーだから、うちのこういう特殊さを許してくれるんだろうと美夜子は解釈した。

「けど、私はそんなに人気はないんです。仕事も年に三回ぐらいで」

美夜子が言うと、那須川は驚いた顔をした。

それを見ながら、美夜子はなんとなく聞いてみる。

「もしかして、私の手に関するお問い合わせですか？」

「単刀直入に言いますよ」

那須川は美夜子の話をさえぎって言い、覚悟を決めたように座り直す。そして、上体を前のめりにし、両肘を膝についた。

眼鏡越しの真剣な瞳に、ドキッとしてしまう。さすが副社長だけあって目ヂカラが半端ない。

しかも、思わず見惚れてしまう美男子なのだ。魅了されないような心理的にブロックする努力が必要だった。

「六木さん、私にお時間を頂けませんか？」

「えっ？」

「正確には今週金曜の夜に……残業があるなら終わるまで待ちますので、私の話を聞いて頂きたいんです。食事でもしながら」

「え……。それは、ここでは話せないような内容なんですか？」

「少々長くなるんです」

「はあ」

「一時間や二時間だと足りないかもしれない。ゆっくりできる場所で話したいものですから。本日はそのアポを取りに参りました」

「どうということだろう？」

美夜子はあれこれ推理する。二時間以上かかる話で、ここでは話せなくて、ゆっくりできる場所で話したいこと？ まさか……

「あ、いや。決まっていかがわしいものじゃないですよ！ いわゆるナンパですとか、そういう目的で誘っているわけではありません！ 断じて」

那須川は焦ったように声を上げた。

セクハラめいた雰囲気は微塵もないし、どうやら嘘を吐いているわけではなさそうだ。それに今

の言葉を聞き、美夜子が予想しているのはまったく別の物だった。

もしかして、ヘッドハンティング？

可能性が高いのはそれしかない。もしかしたら日置繊維は総務部の人員が不足していて、美夜子の噂を聞きつけてヘッドハンティングしようとしているのかも。

これはなかなか大胆な手法だぞ、と美夜子は感心する。こうして副社長が直接会いにすれば断れないし、話を聞いてみようという気にもなる。ならば、条件だけでも聞いてみようか。今の職場に不満はないから転職するつもりはないけど、日置繊維が出てくる待遇に興味があった。給与はどれぐらいなのか、今の自分ならどれぐらいの役職に就かせてくれるのか……

そこまで考えてから、美夜子はうなずいた。

「わかりました。今週の金曜日ですね。残業は一時間ほどを予定しておりますので十九時に上がれます」

「えっ……いいんですか？」

那須川は自分で誘っておきながら、意外そうに言う。まるで断られるのを期待していたように。

美夜子はもう一度うなずき、「大丈夫です。お話をうかがいたいです」とはっきり告げた。

「ありがとうございます。ちょっと予想外でして、断られると思っていたものですから」

「一応お話をうかがいますけれど、お受けするかどうか即断はできませんが……」

美夜子と言うと、那須川は訝しげな顔で「即断？」とつぶやく。

那須川は数秒、何事かを考えてから、さらに言った。

「とにかく承諾してくださって、ありがとうございます。少々込み入った話ですので、詳細はそのときに」

「はい。承知いたしました」

「あと、できればですね、このことは……」

「心得ています。一切口外しません。誰にも」

ヘッドハンティングの話を勤め先の人間に漏らさないのは当然でしょ、と美夜子は思う。

このときなぜか那須川は呆気に取られた顔をしていた。しかし、すぐさまビジネスライクに「そうして頂けると助かります」と頭を下げる。

「当日の夜は、私が御社まで車で迎えにきます。到着しましたらお電話差し上げますので、六木さんは社内でお待ちください。本日は貴重なお時間を頂いて、ありがとうございます」

那須川は丁重に言って、さっと腰を上げた。



那須川と約束した金曜日がやってきた。

十九時きっかりに事務所の電話が鳴り、待ち構えていた美夜子は素早く受話器を取る。

「お電話ありがとうございます。ストラトフォード・エージェンシーの六木でございます」

「お忙しいところ恐れ入ります。日置繊維の那須川と申します」

受話器の向こうから低い美声が聞こえてきた。

那須川さんの声、洪くて素敵すぎる！ カッコイイなあ……

那須川と話しながら、この人、声優さんになつたらイイ線いきそう、と美夜子は妄想する。那須川ヴォイスがアプリで配信されたら速攻でダウンロードするのにな！

そうして、二人はオフィスビルの社員通用口の前で待ち合わせし、電話を切った。

これから美夜子は那須川と食事に行く。今週はずっと、この日を待ちわびていた。那須川の用件が本当にヘッドハンティングなのか気になったし、もう一度彼に会うのが怖いようなうれいような、ソワソワが止まらない。

「六木さん。デートっすか」

パソコン越しに見ると、前に座る小西が半眼になりニヤニヤしている……

小西聡子は二人の子供を持つ働きママで今年四十歳になる。年の割に若く見え、すっきりした顔立ちの美人だ。マネージャーとは名ばかりのなんでも屋で、営業もやるし事務もやるしスカウトもやるし、役員に交じって経営に関わる仕事もする。本人曰く「私はストラトフォードの雑役婦」だそうで、なんでもよく知っていて、モデルたちの扱いもうまく大変頼りになる。

小西は仕事に対しては非常に厳しい。逆に仕事以外は「なんでもオツケー」という、さっぱりした性格だ。おかげで二人はプライベートではよい友人だった。

「超絶イケメンとデートっす」

美夜子も小西を真似してニヤニヤ顔で答えた。

「ええ。今朝方より存じておりました。六木さん、いつも色気のないネズミ色のスーツなのに、今日は黒のお洒落ニット！ シックなお洒落のロングブリーツスカート！ パンプスもハンドバッグも大人っぽいやつだしシヤラシヤラのピアスマでして、ゆるふわ愛されコーデでしたから」

「……残念ながら、正確にはデートではないんです。ちよつと見栄張っちゃいました」

「なあーんだ。デートじゃないのか」

「ちよつと男友達の……相談というか。私が聞く立場なんですよけど」

那須川は男友達ではないけど、こうとしか言いようがない。口外禁止と言われているし、那須川と食事するなんて言ったら、小西に根掘り葉掘り聞かれそうだ。

「あちらがすぐお洒落な人なんで、こつちも妙に気合いが入ってしまうと言いますか」

美夜子が言うと、小西はしたり顔でうなずいた。

「あーなるほどね。美意識高い系の人と会うときって、そうなるよね」

「じゃ、そろそろ私、行きますね。お先に失礼します」

「お疲れさまー」

小西の声を背に事務所の出口へ向かう。エレベーターに乗りながら、彼氏とのデートというものに思いを馳せた。

彼氏かあ。欲しいつっちゃ欲しいけど、出会いが全然ないなあ……

彼氏いない歴は、かれこれ七年になる。就活に失敗して二十歳で短大を卒業したあとの二年間、フリーターをやっていた。そのときにバイトしていたバーで知り合った人と一年だけ付き合った。

最後は浮気されて思い出すのもうざりするほど、さんざんな別れ方をした。それ以来、男性遍歴は真っ白でなにもない。

そもそも出会いが少なすぎるんだよねと、ため息が出てしまう。

二十二歳でハンドモデルにスカウトされ、ストラトフォード・エージェンシーに登録した。うちの事務所のモデルたちは全員女性だし、スタツフも女性が多く、男性は全員既婚者だ。撮影のとき、男性のカメラマンやスタイリストに会ってもせわしなく過ぎてしまおうし、そもそも仕事の現場などでそんな雰囲気になったことは一度もない。

——世の人は、どうやって出会ってるんだろ？

学生時代の友人が男友達を紹介してくれたこともあるけれど、その気になれなかった。出会いの場へ行くのが苦手だし、徒労感ばかりが募るので、いつしか足が遠のいた。

仕事には非常に満足している。たまに忙しいが基本的に定時で上がれるし、人間関係は比較的良好だし、パーツモデルたちをサポートする業務はやり甲斐もあった。他の芸能事務所にありがちな椅子の奪い合いもなく、のほほんとしたムードなものいい。いい事務所に入社できてよかったと思っっている。

——これで彼氏がいれば最高なのだと思うのは、贅沢かな？

社員通用口から外に出ると、すでに夜のとぼりが下りていた。

季節は九月の上旬。今年の秋の訪れは早く、日が落ちると少し冷え込む。今日着てきた長袖ニットでちょうどいいぐらいだ。寒すぎず暑すぎず、四季の中で今が一番過ごしやすい。

なんとなく足を止め、出てきたオフィスビルを振り仰いだ。まだ人々は仕事で、一階から最上階まで全フロアに煌々と明かりが灯っている。ビルの谷間を冷たい風が渡ってきて、スカートを揺らした。

京浜運河に面したこの界限は、すごく綺麗だ。

前方に目を遣ると、運河に向かって延びる一本道の途中にポツンとセダンが停まっていた。辺りは静寂に包まれ、他に車は一台もない。時刻は十九時十五分。こんな時間に運河へ向かう用事も思いつかばないから、人気がないのも当たり前かもしれない。

車のドアに背をもたれかけさせて立つ、長身の影が目に入った。

……那須川さん。

銀の街路灯に照らされ、すらりとしたスーツ姿の那須川が立っている。前会ったときと同じ眼鏡を掛け、髪はきっちり撫でつけられていた。彼はこちらの存在には気づいておらず、はるか遠くにあるビルとビルを繋ぐ空中通路をじつと見つめている。街路灯の明かりが、高い鼻梁から顎と喉仏の鋭角なラインを縁取っていた。

美夜子は時を忘れ、美しく整った横顔にしばし見惚れる。

すると、那須川はポケットからタバコケースを取り出し、一本啜えた。さらに顎を下げ、右手でオイルライターの火を点ける。大きな左手が炎を覆い、眼鏡のレンズがオレンジの炎を反射し、まっすぐな鼻筋と伏せられたまぶたが闇に浮かび上がった。端正な唇が美味しそうに吸い込むと、タバコの先端が明るく輝く。

那須川は目を少し細め、タバコをくゆらせた。

むちゃくちゃ絵になる人だなあ、と感心してしまう。初めて会ったときも思ったけど、ものすごく大人っぽい雰囲気だ。同じ三十五歳の男性なら事務所にもいるけど、もっとチャラチャラして幼いし、ちょっとあんな雰囲気は出せない気がする。那須川は格好つけている感じはなく、すべてが自然な動作なのに、抑えきれずにじみ出ているのだ。洗練された気品とか、成熟した色気のようなものが。

そのとき、那須川は美夜子に気づいたらしく、パツと体を起こして振り向いた。

美夜子も「あつ」と思って足を踏み出し、那須川に近づいていく。

二人の距離が縮まっていく間、那須川は氷のような眼差しで美夜子を捉えて離さなかった。美夜子の鼓動は一步步速くなり、体温が上がってゆく。

那須川のタバコから立ち上った白い煙が、風でふわりと横に流れた。

このとき、美夜子の内側で小さな予感が閃く。

もしかしたら、この人のことを好きになるかもしれない……

しかし、それはごくごく微かなものだ。胸の奥のほうがちりりと疼いただけの。

美夜子はなにもなかったことにし、自らの感情を無視して顔を上げた。

それから、美夜子は那須川の運転する外車に乗り、お台場のホテルモントリヒトにやってきた。

那須川に導かれ、エントランスホールからエレベーターに乗って高層階へ上がると、そこには度肝を抜かれるような空間が広がっていた。

どどーんと数フロアぶち抜きで、みやびな日本庭園が造り込まれている。それをぐるりと口の字に囲んだ廊下があり、料亭の個室が並んでいた。エレベーターは庭園の中心に到着し、点々とレセプションへ続いている庭石が目に入る。

割烹、泉爛亭。超有名な老舗料亭だ。お台場のホテルに支店があるのは美夜子も知らなかった。那須川は常連らしく、レセプションで出迎えた和装の女将と気安く会話している。那須川がすごく頼もしく思えた。自分にとってこんな場違いな所に来て、連れの男性がテンパっていたらこちらもいたたまれない。その点、那須川はそつがなくエスコートも洗練されていた。かくして、二人は個室に通される。

そこは言葉にならないほど、夢のような空間だった。

雪見障子の先に見える庭は、池の周りに松や紅葉などの草木が生い茂り、石灯籠が幻想的にぼうつと灯り、さつと差された和傘の真紅が鮮やかだ。反対のガラス張りの窓からは、はるか下界にお台場の夜景が広がっている。天井から吊るされた、和紙に包まれた球形の照明が窓ガラスにくつきり映り、夜空に浮かぶ満月と合わせると月が二つ浮いているように見えた。庭園も夜景もため息が出る美しさで、ここでいつまでも眺めていたい。

同じ部屋の両サイドの窓で、こんな別次元みたいな景色が見られるなんて！

そして、目の前には日本屈指のスペックを搭載した、見目麗しい紳士が座っているのだ。

眼福すぎるっ！ 来てよかった！ 来てよかったよーっ！

美夜子はしみじみと喜びを噛みしめた。めちゃくちゃテンションが上がってしまう。まだなにも

食べてないけど、ここから見える景色だけで満腹になりそうだ。

そこで、少しだけ那須川の経歴の話になる。

「出向？ なら、本来のご所属は日置物産になるんですか？」

美夜子が問うと、那須川はにこやかに答えた。

「そうです。新卒で日置物産に入社してからずっと繊維事業部にいまして、今も籍は日置物産にあります。うちはある程度の年次になると関係会社に役員として出向するのが通例なんです」

日置物産とは日置繊維の親会社である総合商社だ。日置繊維は、日置物産の繊維事業部が分社化したものと聞いている。

そっかあ、生粋のエリート商社マンか。そりゃあ、こういう店にも来慣れてるよね……

「ところでこのお店、素晴らしいところですね！ お花も、家具も、窓からの景色もどれもこれも贅が凝らされていて、心をくすぐられるものばかりで」

感動が口について出てしまう。

「それはよかった。連れてきた甲斐がありました。六木さんのように素直に感想を口にしてくださると、私としても非常にうれしいです」

那須川はニコニコして言った。

そうこうするうちに料理が運ばれてくる。「僕は運転があるので吞めませんが、遠慮なくどうぞ」とお酒も勧められた。

ひんやりした本鮪が舌の上でとろりととろけた瞬間、美夜子はうっとりする。

うわああ……むちゃやくちや美味しいっ!

鼻に抜ける微かな磯の香り。鮮度の高い鮪の旨味が口いっぱいに広がる。濃厚なコクのある脂質がなめらかに溶けていき、ほんのりした甘みと醤油のしょっぱさが調和していた。つるりと食道をとり抜けて胃に収まり、ため息が漏れてしまう。

それを見ていた那須川は、ふっと相好を崩した。

「六木さん、とてもいい顔して食べますね」

「はっ。す、すみません。あまりにお造りが美味しすぎて、我を忘れてしまいました……」

「どうぞ、存分に我を忘れてください。今夜はそのために来たんですから」

「美味しいだけじゃなくて、もう本当に目に美しいですね。器とか飾りとかも上品で……」

「これは萩焼ですね。食材は全国から産地直送で仕入れられていますよ。甘鯛は今がちょうど旬だから、脂が乗っていて美味しいですよ」

向付は本鮪に甘鯛、さらに甘海老と真ダコが形よく盛りされていた。夕焼けみたいな色の盆に据えられた一皿は、ずぶの素人が見てもすごさがわかる。味もさることながら、眺めているだけでいつまでも飽きない。

「このお店のお料理には、魂が込められている。あるいは、命が懸かっている。そういうのが、はつきりわかりますね。一つの小さな器の世界を取っても」

那須川が美夜子の感嘆を代弁するように言った。

「はい。おっ、これはあきらかに全然違うぞって思います」

「ええ、板前さんの凄みが伝わってきます。何度も試行錯誤を繰り返して、極限まで高められた熟練の技みたいなの……」

「そういう感じ、わかります。もう、感動が止まらないです!」

「六木さんの素敵な笑顔が見られて、僕もうれしいです」

そう言つて、那須川は柔らかに微笑む。

那須川さんて、呼吸するように褒めてくれるよね……

うれしいような恥ずかしいような、ふわふわした心地で箸を進める。彼には同席する人を心地よくさせる才能があると思った。さすが商社マンは接待慣れしている。

甘鯛の切り身も絶品だった。自身の繊維を噛みしめると、じゅわつと甘みが口内に広がる。弾力ある歯ごたえで、少しあぶつてある薄皮が堪らなく香ばしかった。ゴクリと呑み込むと幸福感が広がる。

那須川が選んだ日本酒も、驚くほど口に合った。淡い藤色の切りガラスのぐい呑みを満たすそれは、涼しげに透きとおっている。口に含むと、目が覚めるほどキリツとした辛口で、清涼な水みたいな喉ごしだ。後味も爽やかで、しばらく余韻に浸った。

お酒を呑むと肴がぐつと美味しくなり、肴を食べればお酒がどんどん進む。那須川から「今夜は一切遠慮しなくていい」と言われ、安心感もある。素晴らしい空間もあいまって退屈な日常を忘れ、心ゆくまでお酒と料理を堪能できた。

「今の懐石料理は宴席風のものですが、もともとは茶懐石といって茶の味を生かすため

のものだったらしいですね」

那須川は美しく箸を使いながら言う。

「へええ、茶懐石って……茶道とか茶の湯とか、そっち系ですか？」

「ええ、そうです。このお店のような茶寮も、茶道の精神にならっているのかもしれないな」

「茶道ですかあ。あまり馴染みがないかも」

「私も茶道に詳しいわけじゃないですが、こういうのはすべて繋がっているなと思います」

とつさに意味がわからなかった美夜子は聞き返した。

「繋がっている？ お料理とかがですか？」

那須川はうなずき、補足する。

「茶寮って一種の空間芸術なんでしょうね。料理だけじゃなく、和室の建築や眺望、家具や調度品、掛け軸や生け花といった装飾、お盆やお椀といった食器からお酒の種類まで……それぞれに一流のプロがいて深い歴史や流派があり、個室を中心として放射状に道が延びている」

「すべてが繋がっている……？」

「そういう風には感じませんか？ まるで人間の世界そのものだなと。人工的なものと自然なものが調和して」

「うー。私には難しく、気後れしちゃいます。たくさんの方の努力が積み重なった場所に、私みたいな人間がいていいのかなって。自分がふさわしくない気がします」

「いいですね。私はそういう考え方が、非常に好きです」

「えっ……」

那須川の「好き」という言葉に、ドキツとしてしまう。もちろん深い意味なんてないのはわかっているけど……

「六木さんのように謙遜する感覚、とても大切だと思います。慎重な人が好きです。個人的に」

「そ、そうですか」

「こういう店は一種の聖域なんです。神社仏閣のような聖域にも参拝の作法があるでしょう？ ことも同じです。職人が魂を削って築き上げたものを前に、畏敬の念を抱く。人間として、とても自然で重要な感覚だと思います。私も尊敬の念を抱きますし、やはり同席している人にも同じ感覚でいて欲しいですね」

「誰でも自然とそうなりませんか？ こんなにすごい場所なんだし……」

美夜子の言葉に、那須川はおかしそうに噴き出した。

「誰でも！ そんなわけじゃないですよ！ むしろ、土足で踏みこむ人間が多いですよ」

「えええ！ そうなんですか？ そんなことないと思うけどなあ……」

「残念ながらね。この聖域を偉そうに分析したり、茶化して馬鹿にしたり、無粋な人がいますよ」

那須川の辛辣な物言いに、美夜子ははっとして彼の顔を見る。

一瞬、那須川の刺すような目が残忍に光った。まるで首筋に刃物でも当てられた如くヒヤリとする。初めて会ったときから冷酷さを感じていたけど、今初めて目の当たりにした。

同時に、綺麗な男の人だと改めて思った。ほんの一瞬見せた冷酷な一瞥さえも、怖いのに惹きつ

けられる。

「失礼いたしました。くだらない話で私がこの聖域を侵すところでした。さあ、どうぞ」

那須川は柔和な笑顔に戻ると、とつくりを持ち上げて傾ける。美夜子は「ありがたいございませ」と言いながら、それを受けた。

「六木さんが素敵な方でよかったです。料理もまだまだこれからですし、時間はたっぷりありますから、今夜はとことん楽しんでください」

会食は最後まで進行し、抹茶ケーキと栗のムースと梨が運ばれてきた。ジュシーな梨は噛んだ瞬間、果汁が派手に飛び散る。すでに満腹だったのに、甘いデザートのならかな舌触りに、気づくこと完食していた。

そのあと、二人で温かい煎茶を飲みはじめたが、那須川はなかなか本題に入らない。とうとう美夜子は痺れを切らして言った。

「あのー、そろそろご用件を聞かせてもらえませんか？」

「そうですね。そろそろお話ししないとけませんよね……ここまで来たんですし」

那須川は眼鏡を掛け直して一息吐くと、覚悟を決めたように口を開く。

「六木さん。できれば、約束して欲しいのです。ここで私から聞いた話を誰にも口外しないです。すみません、やっぱり私は臆病者で約束がないとお話しできない。もし、それが無理でしたら、ここでお開きにしましょう。今夜のことは忘れてください。ご自宅までお送りします」

「えええっ……そんな！」

内心超焦りまくる。ここまで焦らされて肝心の用件が聞けないなんて！

那須川の様子からすると、ヘッドハンティングではなさそうだけど――

「約束します！ 口外しないと誓います。なので、お話を聞かせてください！」

その言葉に那須川は神妙にうなづく。

「すみません、六木さん。恩に着ます。では、ここからのお話はご内密に願います」

「承知しました。お約束します、必ず」

那須川は湯呑みを取ってぐいっとおおると、ふうっと思を吐く。そして、襟元のネクタイを左右に揺さぶって緩めた。

「ミュージーシオンというブランドをご存知ですね？ ジュエリーの」

ようやく那須川は語りはじめる。

「ミュージーシオン？」

美夜子はきょとんとオウム返しし、しばらく考えたあと、あつと思いだった。

「一度、仕事をしたことがあります。ハンドモデルの。ただ、その頃はミュージーシオンという名前じゃなくて、ジュエリー・サニシという名前だったと思います」

確か今から四年前の話だ。ちよつと印象的な撮影だったから覚えている。

「ええ。そのジュエリー・サニシのことです。今は名前が変わって、ミュージーシオンというブランドに生まれ変わりました。コンセプトも変わって、二十代をターゲットにしたいわゆるプチプラのアクセサリーを主に手掛けています」

「そうなんですか。当時は確か高級ブライダルジュエリー専門でしたよね」

「そうです。そして、株式会社ジュエリー・サニシは日置繊維傘下の会社です」

「あつ。そうだったんですか！ それは知らなかったです。撮影に行くとき、その企業がどこの系列会社かまでは調べないので……」

「うちの関連会社なんて山のようにありますからね。モデル事務所に仕事を依頼するとき、うちの社名で直接契約することもあれば、グループ会社と直接契約されることもあるでしょう。直接契約していない場合も、グループ企業が広告を作るとき、うちの営業がアドバイスやコンサルティング的なことをしているんですよ。マーケティングなんかも含めてね」

「ああ、そういうことなんですか」

那須川は持つてきていたブリーフケースから透明なフィルムに入った一枚の写真を取り出した。

それはA3サイズで、水面のような質感の黒をバックにほっそりした二本の手が写っているものだった。肘の辺りで両腕が重なるようすつと伸ばされ、両手は咲きほこる花のようにふわりと開き、指先はなにかを求めるように空中で静止していた。手首から腕までツタみたいになつくレスがくるくると絡みつき、涙の形をしたダイヤが垂れ落ちて光っている。白銀に輝くプラチナと上品なパールが交互に連なり、寶石でできた手袋をまとっているようだ。

「あつ。これ、私ですね。懐かしいな」

恥ずかしさが込み上げ、美夜子の頬は熱くなる。

「いい写真ですね」

那須川が儀礼的に褒めた。

「でも、すつごい恥ずかしいですね。実は私、自分の作品ってあまり見ないんです」

「ええ？ なぜ？」

「なんかもう無性に、異様に恥ずかしいんですよ。撮影でチェックのときは必要なので見ますけど、それ以外は極力見ないようにしています。恥ずかしさに耐えきれないで……」

那須川は驚いた様子で、まじまじと美夜子を見た。

「……凡人には理解不能ですね」

那須川の言葉に、美夜子は困って眉尻を下げる。

「説明が難しいんですけど、変な話、ちよつと裸を見られる感覚に似てるんです。舞台の上で演技して、汚い部分も綺麗な部分も自分自身を全部さらけ出して、舞台を降りたあとそれについて冷静に分析されたり批評されたりするのって、すごく嫌じゃないですか。それと同じです、たぶん」

「なるほど。今のたとえばわかる気がしました。きつと魂を懸けてらっしゃるんですね。この茶寮の料理人たちと同じように。私もこの料理人たちが精魂込めて築き上げた聖域について、分析したり茶化したりする輩は大嫌いなので」

「まあ、ここほど高級感はないですし、聖域ってほどでもないですし、料理人の方々と並べて語るのもおこがましい気がしますけど……。一応私なりにハンドモデルの仕事に魂を込めているので」「よくわかりました」

那須川はうなずいて、写真をブリーフケースに戻した。

美夜子は心からホツと言う。

「今の写真、よく覚えてます。カメラマンの人がちよつと印象的な人で……」

「ええ。耳の聞こえない男らしいですね。私は直接会ったことはないですが」

そっか、とようやく美夜子は合点がいく。話というのは、ハンドモデルに関することだったんだ。けど、クレームじゃないとしたら、なんなんだろう？ 仕事の話なら営業経由になるはずだし……

「それで、その写真がどうかしたんですか？ なにか問題があったんでしようか」

美夜子が問うと、那須川はようやく口を開く。

「四年前、ちょうど私は日置繊維の副社長に就任したばかりでした」

◇ ◇ ◇

那須川が初めて写真を目にしたのは、日置繊維の副社長に就任して間もなくだった。

それを持ってきたのは、当時の日置繊維営業部営業第一課長の手島という男だ。

今度、日置繊維傘下のジュエリー・サニシが日本橋に販売サロンをオープンさせる。その宣伝用の写真が役員それぞれに配られたのだ。

日本橋ねえ……

ざつと企画書に目を通し、どこかの企業もとつくにやっっている陳腐な企画だと思った。恐らく売れないだろうと当たりはつく。しかし、この企画に口を出す気はない。批判だけなら小学生でもで

きる。那須川は役員なのだから、それでも成功させるためにうまく部下たちを動かさなければ。棋士にでもなった気分です、どの駒を動かそうか考えを巡らせた。

アパレル業界は商社に乗っ取られたと、よく耳にする。

デザイナーの言い分はこうだ。商社マンは美やデザインやアートを理解しない。数字だけですべて動かそうとする。そのせいでアパレル業界のクオリティは下がるいっぽうだと。デザイナーたちから向けられる敵意は、ひしひしと伝わってきた。

デザイナー連中の理想論にはうんざりだ。美やアートやデザインが、なんのためにあるのか？ 一般大衆を幸せにするためだ。大衆に供するために存在するのだ。アートだけを極めたけりや、業界から退いて引きこもって好きだけ制作に打ち込めばいい。誰も見やしないし、誰も興味を持たないはずだ。どうせ孤独に耐えかね、間もなく戻ってくるだろう。なにかを発信するとはすなわち、受信者の存在が不可欠なのだ。受信者を顧みずに好き勝手作ってそれを受け入れるとは、どういう暴論だよ。そんなこと物理的に不可能だろう。

しかし、彼らの言い分もわからないでもない。崇高な理想や精魂込めたデザインを金だとか流行りだとかで踏みにじられれば、嫌な気分になるだろう。しかし、我々がいなければ彼らは宝石一つまともに消費者に売れない。

かけ離れた理想と現実の狭間で、血反吐を吐いているのは彼らだけじゃない。那須川だってそうだし、どの業界だってそうだろう。誰もが作りたいものと、求められるもののギャップで苦しんでいる。映画も音楽もドラマも、建築や飲食店だってそうだろう。

そんなことをつらつら考えながら、写真を一枚ずつ眺めていった。写真は全部で二十二枚あり、ネックレスをした首元がアップで写っていたり、ティアラを被った頭部が写っていたり、指輪やブレスレットからイヤリングまで商品が引き立つように撮られていた。Noble and Luxuryのコンセプトに沿った、なかなかいい写真だ。それなりに力のあるカメラマンが撮影したんだろう。二十二枚すべてに目を通し、シュレッダーの箱に入れようと手を伸ばす。さて、今後の事業方針をどうするかと考えながら。

しかし箱に入れようとして、ふと手が止まった。

そして、なぜ手が止まったのか自分でもわからず、首をひねる。

そうだ。なにかちよつと引つ掛かるものがあつたからだ。今の写真に。

もう一度写真を手元に戻し、最初から一枚ずつ見直していく。どれだったか……この中の一枚が妙に心に引つ掛かった。

それは十六枚目にあつた。宣伝用に特別制作された非売品で、一カラットあるダイヤモンドのネックレスが写っている。肘から指先まですつと伸びた二本の腕に、くるくると絡まるネックレス。社運を賭けて作られただけあつて、ノーブルとラグジュアリーを体現した見事なネックレスだ。プラチナの白銀とパールと乳白色がダイヤモンドをよく引き立てている。

しかし、気になつたのはネックレスではなく腕のほうだった。

なんの変哲もない腕だ。綺麗だがモデルを撮っているんだから当たり前だし、他にこれといった特徴はない。なぜ、こんなものが気になつたんだろう？

……なんだ？

眼鏡を外して目をこすり、もう一度掛けてしげしげと見直す。一瞬、なんだか見たことがあるような気がした。非常に馴染み深く、懐かしいような……

しかし、そんなことあるはずがない。腕の部分だけを「見たことがある」などとは。誰かの腕の記憶なんて一切持っていない。だが、既視感を覚えたのは確かだ。しかも、かなり強烈に。

写真の両腕は肘の辺りで重なり、手先にいくにつれて離れ、指先は大きな玉をふんわりと包むような形を作っていた。皮膚の表面はなめらかでキメが細かく、発色が実にいい。よく手入れされた爪は桜色につるりと光沢を放っている。

デスクの吸着ボードに写真を貼り、顔を離してじつくり眺めた。無心で、精神を集中させる。さつき意識に浮かんだ奇妙な感覚を、もう一度掘り起こそうとした。

……ん？　なんだ？

なにかが近づいてくる気配。

途方もないなにかが、だんだん迫ってくる。ずっと遠くのほうから、音もなく徐々に近づいてくるのだ。

ものすごくもどかしい感じがした。じれじれしてもどかしく、頭を掻きむしって身悶えたくなるような。長らく忘れていたとても大切なことを、もう少しで、あとほんの少しで思い出せそう……

……なんなんだ？

ゴクリ、と唾を呑んだ音が大きく耳に響く。脈が一打打つごとに速くなっていく。不安と恐怖で動悸がし、これ以上見続けると危険な気がするのに好奇心が抑えきれない。喉の奥のほうが震え、息苦しさを覚えながらも写真を見つめ続けた。二本の白く美しい腕が、立体感を持って眼前に迫ってくる。

そのことがとてつもないほど恐ろしく、尋常じゃない感情の波が引き起こされた。

おっ、おいつ、なんだよこれっ……！

たまらず、大きく息を吸う。あまりに驚いて悲鳴を上げそうになった。

そのとき。

「那須川副社長！」

いきなり声を掛けられ、飛び上がった。はずみでオフィスチェアが軋んで大きな音を立てる。フロア中の社員がこちらを一斉に振り返った。

顔を上げると、手島が怪訝そうな顔で前に立っている。

「副社長、その写真がどうかしましたか？」

「えっ……？」

「いえ、さつきからお呼びしているのに全然気づかれない様子で、写真をじっと凝視されていたので……」

「あっ……」

瞬時に意識が現実を引き戻される。ここは日置繊維のオフィスで、今は昼の十四時で、これから

オンライン会議があるという現実。

「大丈夫ですか？ すごい汗が……」

「あ、す、すまん。ちよつと考え事をしてた。大したことじゃない」

冷や汗をかきながら、どうにか答えた。そして、写真を取り上げて言う。

「手島、ちよつとこれ見てくれないか？」

「まさか、なにか問題がありましたか？ 傷があったとか？」

手島は険しい顔で写真を受け取り、しげしげと眺めた。

「違う違う。いいからもつとよく見てみる」

手島は眉間に皺を寄せ、さらに写真へ顔を近づける。

「……なにか感じないか？」

恐る恐る聞くと、手島は写真を縦にしたり横にしたりして首を傾げた。

「……？ いえ、自分にはわかりません。すみません、なにかお気づきの点でも？」

その回答に呆然とし、血の気が引いていく心地がした。

手島にはわからないのだ。

「どうしたんです？ なにかご様子が変わりますよ……？」

心配そうに聞いてくる手島に、「いや、大丈夫だ。問題ない」と答えた。

それを聞くと手島は、ほっとしたようにうなずく。

「会議、各拠点と繋がりました。じきにはじまります。行きましよう」

「ああ」

素早く写真をデスクに伏せ、立ち上がる。

手島と肩を並べて歩きながら、どうにか呼吸を整えて動揺を抑えた。手島が声を掛けてくれたよかつた。でなければ、悲鳴を上げていたかもしれない。それぐらい心底びつくりしたのだ。

いったいあれはなんだったんだ……？

会議がはじまる頃には脈は落ち着き、ようやく平常心を取り戻す。こんなに驚いた経験は生まれて初めてかもしれない。まったくなんてザマだよ。ちよつと疲れているのかもしれない。

しかし、さつき襲われた得体の知れない恐怖が、胃の裏側にこびりついて消えなかった。

会議を終え、ふたたび席に戻った那須川は、爆発物でも処理するみたく例の写真を封筒に入れ厳重に封をした。封筒に入れるとき、絶対に写真が目に入らないよう注意した。昼間みたいな事態になつたら大変だ。

その日は一日中、写真のことが頭から離れなかった。結局、写真は家に持つて帰ることに決め、残りの二十一枚はシュレッターに掛けた。他にも同じような構図の写真が何枚があつたが、妙なことになつたのはあの一枚だけだ。

いったいなぜなんだろう？ と首を傾げると同時に、好奇心を刺激された。

この月曜日を境に、那須川の人生は劇的に変わり果ててしまう。

写真を家を持つて帰つたが、封を開けるのに数日を要した。開けようとする尋常じゃない恐怖が蘇り、躊躇してしまふ。仕事も忙しく帰宅したらベッドに倒れ込む日々で、余計なことを考え

る余裕もなかった。写真は神楽坂にある自宅マンションのデスクの引き出しに入れ、放置した。

封を開けられないまま翌週に入り、火曜が過ぎ、水曜が過ぎ、木曜になる頃には『このままだとマズイ』と思いはじめた。写真が気になつて仕事に集中できない。とつとと開封して、あれがいったいなんなのか真相を確かめなければ。

そうして、ようやく週末がやってきた。

土曜日は早起きして朝食を食べ、スポーツジムでみっちり汗を流した。帰りはスパーに寄つて食材を買い足す。基本的に外食だが、料理が好きなので休日は自炊するし、平日も余裕があれば朝食を作る。買った食材を使い、ランチはかぼちゃのキッシュとチキングラタンを作ることにした。

オープンレンジがキッシュのチェダーチーズをじりじりと焦がしている間に、那須川は封筒を開けて例の写真を取り出した。

書斎の、といつても六畳の洋間に本棚とデスクを置いただけだが、デスクのボードに写真をセロハンテープで貼り、電気スタンドのスイッチを入れる。ライトが写真に当たるように位置を調節し、リクライニングチェアに座つてそれを眺めた。

危惧していた混乱は起きず、落ち着いてじっくり写真を眺めることができた。

素直に、とても綺麗な腕だと思つた。腕だけじゃない。手首から手の甲、指先まですべてが素晴らしい。肘から手首に向かって、しゅうつと細くなつていく流麗なライン。手首の骨の控え目な凹凸。ふつくらした手のひらと、長く伸びた指はうっとりするほどしなやかだ。触れたくなるほど肌が白くなめらかで、関節の皺の一本一本も計算して刻まれたように芸術的だった。桜色の爪は艶や

かに光を放ち、つるりとした指の腹は触れてもいないのに、むにやりとした触感が伝わってくる。ぞわりと、臍の下が疼く感じがした。

……なんだ？

やっぱり既視感がある。よく知っている人の腕なのか？ だから、こんなに強い既視感に襲われるんだろうか。

誰の腕なんだろう？

それを調べるのは難しくない。しかし、那須川は長い間そこで写真を見つめていた。ひどく心地よかったからだ。

ピーツピーツとオープンレンジが鳴り、キッシュが焼き上がったことを告げる。そこで、ようやく我に返った。

キッチンまで行ってキッシュを取り出し、グラタンと白ワインと共に書斎まで運び、写真を見ながらそれらを食べた。写真はどれだけ見てもまったく飽きない。本を読んだりテレビを観たりするより、手を見ながらのほうが食事の美味しさが増す気がした。

手が宝石を引き立てるといふより、宝石が手を引き立てている。この写真の主役は宝石ではなく、手のほうだろう。

食べ終えてからもワイングラスを傾けながら写真を眺めていた。やがて太陽が西に傾いたとき、そろそろ動かなければと思った。それでも、腰を上げるのにかなりの時間を要した。まるで手の持つ魔力に縛られてしまったみたいだ。

誰の手なのか調べてみるか。

好奇心に衝き動かされ、椅子から立つ。スマートフォンを取り出し、少し迷ってから電話を掛けた。

五回コール音が鳴り、手島が電話に出る。

「那須川副社長？ どうしたんですか急に。なにかトラブルですか？」

受話口から手島の緊張した声が聞こえてきた。

「いや、すまない。トラブルじゃないんだ。君に一つ頼みたいことがあるんだが……」

那須川は通話口に言った。

「頼みたいことですか？」

「先週の頭にジュエリー・サニシの宣材写真をくれたらどう？」

「ええ、お渡ししました」

「あれのデータを至急送って欲しい。僕のプライベートのアドレスのほうに」

「承知しました。やはりなにか問題があったんでしょうか？」

「問題があれば受け取ったときに話してる。あれのモデルが誰なのかわかるか？」

「えーっと、全員ですか？」

「できれば」

「いや、ちょっと個人名までは。ですが、全員ストラトフォード・エージェンシーのモデルたちです。あの事務所のことはご存知かと思えますが」

「ああ、ストラトフォードなら知ってる。うちがサニシに紹介したんだっけな」

「制作はサニシの広告宣伝部の者がやりました。撮影は確か個人のカメラマンに委託したと思います。ポートレイトの撮影では有名な、耳の聴こえない男です。彼か、もしくはサニシの広告宣伝部に聞けば、どの写真がどのモデルのものかわかると思いますが」

ここで一瞬、迷う。どこまで手島に調べさせるか、それともすべて自分で調べるか。

「どうもありがとう。休日が悪かった」

そう言うと、手島は丁重に聞いてきた。

「モデルの個人名まで私のほうで調べなくてよろしいですか？」

「いや、いい。必要であれば僕が調べるから」

「しかし、なんでまた今頃になって……」

「君は知らなくていい」

「承知しました」

手島はあっさり引き下がる。日置グループの人間は上司の命令には絶対服従だった。悪しき習慣だが、こういう場面では非常に役に立つ。

「ありがとう。それじゃ、また月曜日に」

「はい。お疲れさまでした。失礼いたします」

「お疲れさま」

那須川は、そう言つて電話を切った。

とりあえず、今日はここまでだな。週明けを待つて、サニシの者になにかのついでに聞くのがいだろう。

手島は仕事の早い男で、三十分と経たずに写真データの圧縮ファイルが送られてきた。

例の手のファイルはすぐにわかった。こうして画像を並べてみると、あきらかに異彩を放っている。目を引くし、まったく異質で、それはネットワークレスの写真の振りをして全然違うものを表現している……そんな風に見えた。ネットワークレスの写真に擬態した別のなにか……

それとも、こんな風に見えるのは僕だけなのか？

パソコンだと画像を拡大できる。ズームしながらあちこち見つっつ、つるりとしてキメの細かい皮膚だと感嘆する。角質はキリッと整い、毛穴は透明で、まさに透きとおるような肌とはこのことだ。表皮は水分を含んでみずみずしく、適度な脂分が光を反射してきらめき、それらが流れるようになめらかなのだ。

那須川はうつとりと肌質の美しさを堪能した。清らかで神聖な肌であると同時に胸がドキドキするような、艶のある肌。

そうだ。この手には、したたるような色気がある。もやがかかって見えるほど、すごく官能的であらぬ妄想を掻き立てるような……

股間が熱く燃えるような心地がする。猥褻画像をこっそり見るような背徳感に襲われながら、つぶさに写真を眺め回した。

……触れてみたい。この手に触れたら、どんな心地がするだろう？ 質感はどうだろう？ つる

つるしてるのか、さらさらしてるのか。冷たいのか、温かいのか。きつと痺れるような刺激を起こしてくれるに違いない。そして、できれば舐めてみたい……

濡れた舌を皮膚の表面にじわじわと這わせる感触。それは、ため息が出るような妄想だった。ほっそりした美しい指が、こちらに向けて伸ばされる。その硬い爪の先を、そつと唇で挟む。ひんやりした指の腹を唇の表面で優しくなぞり、つるつと口腔に導き入れる。興奮で喘ぎながらそれを舌で絡め取り、しゃぶり回す……

硬い指に口腔内を掻き回されるのを想像しながら、異様に昂っていた。脈拍が速くなり、口内の粘膜から唾液が溢れ出す。急速に体中の血流がぐうつと股間に集まっていつて……

危うく勃起しそうになり、ハッと我に返った。

「？」

な、な、なんなんだっ……？ ちょっとおかしいぞ！

頭から冷水を浴びせられたようになる。かつてないほど変態的な妄想に自分でおののいた。とつさにパソコンに表示していた画像上のボタンをクリックし、写真の画面を閉じる。

おいおいおいおい、勘弁してくれよ……。手を相手に、いったいなんで欲情してるんだ？ そもそも僕にそんな趣味なんてなかるうが。僕が欲情するのは女性の裸体であつて、断じて手や指じゃないぞ。

一瞬、アブノーマルな世界へ行きそうになってヒヤヒヤした。腋の下に冷たい汗をかき、窓を見てもぎよつとする。

外はすでにとつぷり日が暮れていた。時計を見ると、もう十九時前を指している。

「なんてこった……」

手島に電話したときは十六時前だった。三時間以上もひたすら写真を眺め回していたことになる。時間の経過にまったく気づけなかった。

「あきらかにおかしいだろ……」

不可解な己の挙動にゾツとする。このとき本能的に『これ以上この写真に関わるのはマズイかもしれない』と感じていた。

……疲れているのかもしれない。

妥当な推論だった。ずっと仕事が忙しかったし、今日はジムで体を痛めつけたし、自分でも気がかぬうちに限界を超えていたのかもしれない。

今夜は早く寝よう。そして、明日はのんびり過ごそう。写真のことは忘れよう。そう決意し、すぐさまパソコンをシャットダウンした。

しかしその夜、写真の手が自分の体を隅々まで愛撫する淫らな夢を見て——結局、日曜日も丸々写真を眺めながら過ごした。

月曜に出社するとき気が重かった。土曜の夜に淫らな夢を見たこと。日曜日は写真をオカズに自慰に耽る自堕落な過ごし方をしたこと。それらに対する罪悪感で胃が重い。貴重な休日が写真によつてすべて潰された。

勤務中も気はそぞろで、例の手のことを思い続けた。縮小した画像をスマートフォンに入れてき

て、こっそりそれを何度も眺める。写真を見ていると心がひどく落ち着いた。しかし、あまり長時間眺めていると淫らな気分を誘発されるので、そうなる前に画面を閉じた。

表面上は何事もなかったように会議に参加し、意見を請われれば発言し、レビューを聞いて懸念事項をメモした。席に戻って社内システムを起動し、溜まっていた稟議データに目を通し、決裁ボタンを押した。部下からプロジェクトに関する相談を受け、繊維事業部時代に取り引きしていた会社を紹介し、親会社の役員に向けた報告書を作った。

手の持ち主はジュエリー・サニシの広告宣伝部に聞いてすぐ判明した。

名前は六木美夜子。ストラトフォード・エージェンシー所属のパーツモデルで、本業は同事務所の総務らしい。勤続二年、年齢は二十代だと聞いた。それ以上はわからない。顔写真や生年月日を知りたければ別の機関に調査を頼むしかない。

さんざん迷った挙句、興信所に六木美夜子の調査を依頼した。よく結婚前に行われる身辺調査と同じようなものだ。

調査には二か月を要した。那須川は受け取った調査結果報告書の白い封筒を、夜中に自宅のリビングで開いた。

初めて見た六木美夜子はすつきりした顔の若い女性だった。美人の部類に入るだろう。顔写真をつぶさに眺め、履歴をひととおり読んでから、これはまずいかも思はないかと思いはじめていた。

六木美夜子は残念ながらブサイクでも太ってもいなかった。老いてもいなければガキでもなかった。冷たそうだが綺麗な人だし、三十一歳の自分と七歳年下の彼女が仮に恋人同士だったとしても、

なんら不自然ではない。

——僕は日夜この女性の手を見て、淫らな妄想をしていたわけだ……

報告書にはこうある。女子高卒。そのあと都内の短大に行き、卒業後は二年間フリーターをやる。そのあと現在の事務所に入社。なぜモデル事務所で総務をやっているかはわからない。事務能力を買われて事務所にスカウトされたのかもしれない。

情報を取り寄せてよかった。あの謎の手にはちゃんと持ち主がいて、一個の人格を持ちひたむきに人生を生きている。やはり彼女をこんな風に貶めるべきじゃない。仮に妄想の中だけで、誰に知られることはないとしても。

もう、やめよう。こうして身元もわかったことだし、一連のことは自分だけの秘密にし、まともな世界に戻ろう。ストラトフォード・エージェンシーの社員なら、いずれ会うかもしれない……そう決意して立ち上がる。報告書はデスクの鍵付き引き出しに厳重にしまった。二度と見ることはないと思いつながら。

しかし、物事はそう簡単に運ばなかった。気づくと手の肌感に思いを馳せる日々が続く。まるで自分の目を盗むように、こそこそスマートフォン画像を眺め、家に帰ってから背徳感に襲われながらパソコンの前に座り続けた。『このままだとマズイ』と冷や汗をかくのはいつも、精を放ったあとだ。

しかし、どんなに落ち込んでも妄想は広がり、飽くことなく繰り返してしまう。

土日は寝室に手の写真とノートパソコンを持ち込み、朝から晩まで心ゆくまで手の妄想を堪能し

た。食事は冷凍食品を買い込み、なるべく短時間でエネルギーを補給し、手の妄想にかける時間を最優先にした。

人が墮落するときは、こんな感じなんだろうか？

自分は決して手フェチじゃない。そのことは自分が一番よくわかっていて。しかし、ノーマルな男を妙な世界に引きずり込んでしまうほど、手の魅力が激烈なのだ。

まるで濁流に吞まれるように、あつという間に変態の世界へ連れていかれた。まさかと思つて他の女性の手も見えてみたが、こんな風におかしくなったことはない。那須川がおかしくなるのは六木美夜子の手に対してだけ、ということになる。

そのことがいつたい、なにを意味するのか……

そんなこと、まったく想像がつかない。自分でどうすることもできないまま、媚薬を吞まされたみたいに夢と現をさまよい続けた。

いつの間にか好きだった料理も作らなくなり、自宅で食べるときは冷凍食品か出前ばかりになった。毎夜の如く淫らな手の夢を見て、休日は引きこもりがちになり、スポーツジムにも行かなくなった。ゴルフも飲み会も社交的な誘いは理由をつけて断り、取引先には呆れられ、友達も失い、仕事のクオリティもだだ下がり。それでもどうにかゾンビのように生き続け、気づけば三年が経過していた。

那須川は写真のせいで、別人になり果ててしまったのだ。

しかし、これらの事実を六木美夜子にそのまま話すわけにはいかない。知られたらマズイ部分は

うまく誤魔化さなければ。

だから、「手がすぐく気になって仕方なかった」「手の夢をよく見た」「会社の人脈を使って君のことを聞いた」と、核心部分はぼかして話をするしかなかった。

◇ ◇ ◇

那須川の話聞き終えた美夜子は、猛烈な恥ずかしさに襲われていた。

恥ずかしいというか、うれしいというか、照れくさいというか、驚いたような恐れ多いような雑多な感情が渦巻く。

ちよ、ちよ、ちよつと、ちよつとちよつと待つてよ？ ちよつと待つてよっ！

美夜子は頭を抱えた。混乱したり動揺したりすると、ついこのポーズをしてしまう。

上目遣いでチラリと見ると、那須川はホッとしたように眼鏡を外している。たぶん長い話を終えて肩の荷を下ろした気分なんだろう。オールバックにしていた前髪が数本、額に垂れて少し若く見えた。那須川は美夜子の混乱には、まったく気づいていない。

——那須川さん、今自分で話したことの意味、わかっただけなのかな……

バクバクと心臓が口から飛び出そうだ。頬が急激に熱くなり、両手で頬を押さえて下を向く。赤い顔を彼に見られたくなかった。

彼はこう言った。手をひと目見てから忘れられなくなった。朝から晩まで手のことばかり考え

ていた。手のことが気になりすぎて仕事が手につかず、情緒不安定になった。手はとても綺麗だし、肌の質感も素晴らしい。これまで見たことがない芸術的な手だと思う。手の画像をスマホに保存し、繰り返し眺めている……

そ、そ、それってつまり、つまり……

うつむきながら唾を呑むと、ゴクリと耳に響いた。

——つまり、私の手の熱狂的なファンってことで、いいんですかね？

いや、でもどうだろう。そうなの？ そうだよね？ 普通に考えたらそうだよね？ なんか私の手に恋してるみたいになってるもんね？ じゃないと、こんな風にお金と時間を掛けてわざわざ会いにこないよね？ 彼の長い話を一言でまとめると『あなたの手が好きで好きで仕方ありません』ってことになるような、ならないような……

うんうん。それで間違いないぞ。しかも、彼はそのことに自分でまったく気づいていないっぽい。ものすごく頭がよさげで、なんでも知ってる人みたいに見えるのに、まるで恋を知らないみたい。

それで心配になって『こんな症状が出るんですけど病気でしょうか？』と病院に来た患者のようだ。『ふーむ、恋の病は治せませんな』とか言えればいいのかな？

いや、でもちよつと待てよ、と思い直す。

——私の「手の」ファンなのであって、私のファンじゃないんだよね？ そうだよね？ 彼が恋しているのは私の手の部分だけで、私の人格や容姿は一切含まれないわけで……。そうだ、そういうことだ。別に照れる必要なんてないか。

そう思うと心拍も落ち着いてきた。よく考えたら過去にも同じことがあった。手のグラビアやプロモーションビデオを見た視聴者から『素敵な手ですな』とファンメールを頂くのだ。所属モデルたちは皆SNSをやっているから、そこへメッセージを送ってくる人もいる。

この業界はなかなか奥が深く、売れっ子モデルになると非公式のファンクラブまである。

これはきつと、そういうのと同じようなものだ。那須川がおかしくなるのは美夜子の手に対してだけというから、厳密には手フェチでもないんだろうけど、持ち主が誰であれ手に対する執着を持つているのは間違いない。彼の話を聞く限り、芸術的な興味があるだけで好意はないらしいけど……

悪い気はしない。これまでの人生、なにより手を大切にし、すべてを賭してきた。他人から見ればくだらないだろうけど、自分なりに手の表現について考え続け、情熱を燃やしてきたのだ。だから、あらゆる賛辞の中で、手を褒められるのが一番うれしい。それが芸術的な興味だろうが、なんだろうが。

——それに、那須川さんてすごく素敵だし魅力的だし……

彼はこれ以上ないほど紳士的に事を進めてくれた。ちゃんと自分の立場と身分を明かし、きつちり会社経由でアポを取り、こちらに断る猶予も与えた上で素晴らしい席を用意した。権力を行使すれば美夜子を支配することもできたはず。それをしなかったのは、優しさと誠実さだと思う。こちらの人格を踏みにじったり傷つけたりしないよう、細心の注意を払ってくれた。

普通なら、彼みたいな立場の人と関わる機会はない。若くして大会社の副社長に就任し、世界を

股にかけるような仕事をしている彼とは住む世界がまったく違うから。

美夜子はシルクの手袋をした手を、祈るように組んだ。この手が繋いでくれた縁なのかなと思う。ここまでされて彼に惹かれられないでいるのは難しい……

「実はまだ、この話は終わりじゃないんです」

おもむろに那須川は言った。

「え？」

美夜子は小さく目を見開く。

「写真のモデルがあなただと判明したとき、あなたに会う気は毛頭なかったんです。あなたの名前は僕だけの胸にしまって生きていこうと思つてました。だから、あなたの存在を知つてからの数日間、ひどい状態のまま耐え忍んできたんです」

「じゃあ、なぜ、今になって会いに来られたんですか？」

「実は僕にきっかけをくれた、とある人物がいるんです」

「とある人物？」

美夜子が聞き返すと、那須川はうなずく。

「そいつが僕に助言したんです。あなたに会いに行つたほうがいいと。あなたに会わない限り、僕のこのひどい状態は続くぞと」

「それは……私の知つてる人ですか？」

美夜子の問いに、那須川は首を横に振つた。

「いえ、僕の個人的な友人です。僕の大学時代の同級生で……」

こうして、那須川は続きを語りはじめた。



その男の名は魚住祐うおずみたすくと言う。

那須川と祐は帝都大学の法学部で同級生だった。クラスは別々で、一年二年の必須科目の講義のときに、那須川は大講堂で祐の姿を見かけていた。

それぐらいの年齢にはありがちかもしれないが、祐はズバ抜けて目立つファッションをしていた。那須川も当時ファッションに対して並々ならぬ興味を持っていた。海外のものも含め主要なファッション誌はあらかじめ購読していたし、ハイブランドからストリートまでのトレンドを頻繁ひんぱんにチェックし、力のありそうなデザイナーやパタンナーの名前まで憶えていた。いつかアパレルに関わる仕事がしたいと考えていたから。

初めて祐と話したのは、大学三年のときだ。

その頃にはうつつすらと繊維商社に就職しようと決めていて、あとは速やかに単位を取るだけだった。刑事訴訟法のゼミを選び、そこで祐に会った。間近で見た祐はひよろりと背が高く、女のよう線ひげの細い美貌の持ち主。目だけやたらギラギラ鋭いのに、笑うと非常に無邪気で、笑顔が印象的な男だった。

彼の身なりから予想していたとおり、やはり祐もファッションに興味があるらしく、二人はすぐ意気投合した。

在学中の祐は熱心に作曲し、その曲でダンスを踊った動画をネットに上げていた。祐はギターも弾けたしドラムも叩けたし、歌わせてもすぐ情感豊かだった。しかも、文化人類学とか民俗学とか哲学とか、人類の謎に迫るような分野に造詣が深かった。

だから、卒業後はネットとストリートで歌い手になると言った祐を誰もが笑ったが、那須川はなるほどいいなと感心し、自由人の祐らしいとうらやましかった。

祐とは一度だけ大喧嘩をしたことがある。

それは、進路の話をして那須川が「商社に行く」と言ったときだ。祐は驚愕に顔を歪め、「正気か？」と聞いてきた。祐のリアクションに純粋に驚いたが「正気だ」と答えた。すると、祐はまるで裏切りにでも遭ったみたいに憎々しげな、軽蔑に満ちた表情をしよう言った。

「信じられない。おまえがそんな臆病者だったなんて。もつと勇気がある奴だと思つたのに」
「なんだって？」

正直、商社に行くことがなぜ臆病者になるのか、さっぱりわからなかった。しかし、現実には祐は猛烈に怒っているのだ。激怒していると言っている。

「就活なんてただの洗脳だろ。一部の大企業が利潤を得るための茶番じゃねえか。それに踊らされてるのは金の亡者に成り下がった奴隷どもだ。自分自身で生きることを放棄して、金と権力に依存する臆病者だつってんだよ！ おまえはそんなこともわからないバカなのかよ！」

祐の言葉に、カチンときた。

同時にこうも思った。祐の家は都内に大邸宅を構える資産家で、金に困ったことがないんだろう。だが、僕は違う。北海道にある僕の実家は決して裕福ではない。こいつはお坊ちゃまだから、そんな理想論が言えるのだ。

「おまえの言いたいこともわかるけど、どんだけ御託並べたって世の中カネで動いてんだよ！ これは洗脳だろう、これは正しくないだろう、これは理想的じゃないだろうってわかっていたって、ある程度妥協して大衆に寄り添っていかなきや、やっていけないだろう？」

「はあ？ 妥協ってなんだよ？ だから、それが洗脳だつってんだろ！ 目え覚ませ。ある程度の妥協なんてない！ 少しでも妥協したら終わりだ。俗に迎合したらおしまいだつて言つてんだよ！」

「目を覚ますのはおまえのほうだよ！ おまえがいくら曲を作つたつて、それを聴く人がいなきや意味ないだろうが」

「意味なんてどうでもいい。オレはオレの好きな曲を作るだけだ。聴衆なんていらぬ」

「嘘吐くな。おまえは誰かに聴かせたいはずだ」

「だからなんだよ？ オレが誰かに聴かせたかつたとして、おまえみたいな臆病者じゃない。おまえがやってくれることは、レコード会社に媚びへつらつて好きでもない曲を書いて聴衆に金を配つて聴きに來ててくださいと土下座して回るような行為だぞ。わかんないのか？」

「論理が飛躍しすぎなんだよ。おまえが作曲で使つてるそのパソコンは誰の金で買ったんだよ？」

ギターは？ ドラムは？ 全部おまえの親の金だろうがよ！」

この言葉はかなり効いたらしく、祐はぐっと黙り込んで、すごい形相で睨みつけてきた。

しかし、那須川もかなり怒っていた。祐が歌い手になると決めた進路を心から応援していた。那須川とは進路がまったく違うけど、祐の決断と人生を尊重しているつもりだった。それなのに祐のほうは那須川の決断と人生に土足で踏み込み、めちゃめちゃに貶めてきたのだ。そのことに傷ついたからこそ猛烈に怒っていた。

二人は参号館と呼ばれる、今は使われていない旧校舎の二階にある小さな講義室で睨み合っていた。

「僕の人生は僕が決める。僕の領域に土足で踏み込むな」

那須川は冷ややかに言った。那須川は基本穏やかな人間だが、他人からプライベートに土足で踏み込まれることを絶対に許さなかった。相手が家族でも友人でも容赦しない。他者からの干渉をヘラヘラ許していたら、自分の人生なんて生きられない。

すると祐は、飲み終わったコーヒートの空き缶を力任せに床に叩きつけた。空き缶はけたたましい音を立てて弾んで転がり、講義室の壁に当たる。

「踏み込まないさ。もう二度と話すこともない」

祐はそう言って鬼気迫る顔で睨みつけた。

「十年後、おまえは自分で自分が手に負えなくなつて、絶対に後悔する。忘れるなよ。おまえのその臆病さが、いつかおまえを殺すだろう」

祐は不吉な予言みたく宣言すると、講義室から出ていった。

それから祐とは卒業まで二度と口をきくことはなかった。学内で見かけても、ゼミで会つても、絶対に目を合わせなかった。そのあと、那須川は無事に日置物産の内定を勝ち取り、帝都大学を卒業した。

今思えば、お互い若かつたんだろう。若い頃は他人との距離感を間違えて干渉しすぎたり、傷つけたり傷つけられたり、そういうことがよくあると思う。今ならそういう失敗があつたつていいと許せるのに。このときもう少し大人だったら、もっと別の結末があつたのかもしれない。

しかし、祐とはそれつきりで会うこともなかった。

——おまえのその臆病さが、いつかおまえを殺すだろう。

祐の呪いの言葉を忘れることはなかった。折に触れて何度も思い返し、祐はなぜあんなことを言つたんだらうと考えた。特に根拠なんてなく、単に嫌がらせをしたかっただけなのか……

だんだん歳を取るにつれ、そのことを思い出す回数も減つていった。目先の仕事に忙殺され、それどころじゃなくなつたのだ。

そうして、十二年の歳月が流れた。

スマートフォンには祐の電話番号が残っている。大学を卒業してから数えきれないほど機種変更したりキャリアを変えたりしたが、祐の電話番号だけはなぜか消せなかった。

祐に電話するのに迷いは一切なかった。普通なら絶対に電話しない。しかし、今はそんなプライドを守る余裕さえなかった。

おまえのその臆病さが、いつかおまえを殺す……

今的那須川はまさに祐の言葉どおり、完全に殺されたも同然なのだ。肉体的に殺されたわけじゃない。精神的に殺された。あの写真を見た瞬間に。商社マンとして精力的に仕事をこなし、スポーツジムで体を鍛え、より完成度の高い人間を目指して努力していた那須川は、もうどこにもいない。祐の電話番号は変わっていなかった。突然の電話に祐は驚かなかったばかりか、待つていたかのようによに『遅かったな』と言った。少々面食らったが『話がある』と言うと、祐は『いいよ』と二つ返事でOKし、待ち合わせの場所と日時を決め、余計なおしゃべりはせずに電話を切った。

数日後、二人は懐かしのJR御茶ノ水駅近くの聖橋で待ち合わせした。御茶ノ水には大学のキャンパスがある。

ひさしぶりに見た祐は、驚くほど変わっていなかった。

「おっさんになったな」

那須川を見るなり、祐はニヤリとして言った。

「おまえが変わらなすぎなんだよ」

那須川はそのまま感想を述べた。

二人は小川町にある古ぼけたカフェに入った。紅茶を専門とするカフェで、大学時代、祐はこのアールグレイが絶品だと足しげく通っていた。店主は当時よりぐっと老け込んだが元氣そうで、なんとなくうれしい気持ちになった。

テーブルを挟んで目の前には魚住祐。昔と変わらぬ店の雰囲気と紅茶の味。十二年前にタイム

リープした気分で、那須川はアンティークのソファに腰を落ち着けた。社会人同士がひさしぶりに会ったときに交わされる「仕事はなにやってるんだ」とか「結婚したのか」とかいう一般的な会話は皆無だ。そうだ、祐は昔からそうだった。祐はソファにふんぞり返って足を組み、ひじ掛けに腕を載せて頬杖をつくと言った。「なんか持つてきたんだろ？ 出せよ」

ドキリとした。祐にすべてを見透かされているようでヒヤリとする。しかし、そんなはずはないと思いつつ話があると呼び出された場合、なにか出せと言っておけば当たる確率が高い。カマを掛けているんだらう。昔から勘が鋭いのかふざけているのか、どちらかよくわからない奴だった。説明するのも面倒なので、とりあえずド直球ストレートでいくと決めた。ブリーフケースから例の写真を取り出し、紅茶のカップを避けてテーブルの上に置く。

祐は黙って写真を取り上げた。そして、背もたれに寄りかかり、それをじっくり眺めた。一ミリも表情を変えない祐の顔を見ながら、じっと待った。無性にタバコを吸いたくなったが、二十五歳のときから禁煙しているので我慢した。最近はどうタバコのことなんて思い出しもしなかったのに。

祐はかなり長い時間、熱心に写真を眺めていた。窓の外は日没間近で、本郷通りを車のヘッドライトが照らしだしては去っていく。季節は春で、ちょうど桜が終わりかけの頃だ。土曜の夜のこの辺りはまったく同時だと同時にワクワクするような、なんとも言えない雰囲気漂う。それと

も、学生時代の記憶がそう感じさせるのか。

「エッロ。すっごい、どエロいね、この手」

祐は感心したようにうなずき、つぶやく。

「こんなにエロい手、生まれてこのかた見たことないや。ヤバイ、勃ちそー」

祐の言葉に、鼓動が強く胸を打った。

……こいつにはわかるのだ。

強い驚愕と恐怖のような感情に襲われ、心臓がドクンドクンと勢いよく血を巡らせる。両肘をテーブルに載せて両手を組み、必死で動揺を抑えた。なぜか昔から祐に弱みを見せるのが嫌で、動揺したり傷ついたりしても隠す癖があった。

祐はゆっくりまばたきを一回すると、写真を返しながら言った。

「で、調べたわけか」

……調べただって？ なぜ僕が興信所に調査を依頼したことまで知ってるんだ……？

内心慌てふためき、腰を浮かしかけた。しかし、ここでふと冷静になる。いや、そんなことまで知っているはずはない。たまたま言い当てただけだ。

祐は尋常じゃなく感性が鋭いから、相手の表情や前後の話の流れを読み取ってアタリをつけるのがうまいんだろう。

このとき、祐にこの相談を持ちかけて正解だったと、確かな手応えを感じた。やはりこの件を理解できるのは、こいつ以外いない。他の奴じゃ全然ダメだ。こいつじゃなければ。

「……一応。名前と勤務先ぐらいは」

とりあえず答えると、祐は冷笑して言った。

「嘘つけ。本当は年齢も住所も顔写真まで調査済みだろうが」

ズバリ言い当てられ、頬が熱くなっていく。

祐は小馬鹿にしたように首を傾げて目を細め、言った。

「だから言っただろ？ あのと逃げ出したから、今そんなにコソコソする羽目になってるんだよ」

「逃げ出した？ なんの話だよ。僕がいつ、なにから逃げたんだ？」

内心もしかしてあの大喧嘩した就活の話だろうか、と思いつながら聞いた。

「わかってるだろ？ おまえは自分の人生を生きることから逃げ出しただろうが」

「その話か。僕は逃げてなんかないし、ちゃんと僕の人生を生きる。逃げ出したのはおまえのほうだろうが」

「ま、その話もういいや。どうせ平行線だから」

祐はさらりと言って視線を逸らし、紅茶を一口啜った。

「で、オレになにして欲しいの？」

祐の言葉で、妙な敗北感に打たれて唇を噛む。しかし、そんな勝ち負けとかプライドにこだわっている場合じゃない。祐に土下座してでも突破口を見出さねば。もう一刻の猶予も許されないのだ。「妙な夢を頻繁に見るようになった。性的な……手の夢なんだが。そのせいでここ三年ともに

眠ってない」

正直に打ち明けた。祐は「続けて」とばかりに黙ってうなずく。

「朝から晩まで手のことが気になって仕事に身が入らない。どうにか誤魔化してこなしているが、実害が数字に出るのも時間の問題だと思う。この手に対してしか、その……勃たなくなつた。趣味も嗜好もがらりと変わった」

「ふーん」

「カウンセラーか心療内科にかかるうかと思つたが、真つ先におまえの顔が浮かんだ」

「おまえの間違ひだらけの選択肢の中で、そこだけ合つてる。唯一の慧眼だな」

祐の偉そうな物言いにカチンときたが、耐えた。

「おまえに言われた言葉がずつと忘れられなかつた。十年後に僕の臆病さがいつか僕を殺す、と」

「そんなこと、言つたっけ？」

祐がとぼけて首をひねるので、強めに声を上げた。

「言つただろうが！ 忘れたのか？ おまえの言うとおりになつたんだよ！ 実際には十二年後だし肉体が死んだわけじゃないが、今の僕は死んだも同然だ。毎日ゾンビみたいに生きてる」

「オレがした予言じみたことと、おまえがそんな風になつたのは、全然関係ないよ」

「そんなことわかつてる！ けど、そのことについてももう少し詳しく話が聞きたいと思つたんだ。

おまえはその……僕が理解していない領域のことまで、知っているようだから」

「そんなことないよ。知識の量で言えば、オレより圧倒的におまえのほうが多いよ」

祐は手にした四角いオイルライターをもてあそびながら言う。

「知識の量じゃなくても、こういうワケのわからん分野におまえは造詣が深いと思つたから。僕よりもはるかに」

それを見ながら言う。くそつ、どうしてこんなにタバコが吸いたいんだ？

「造詣が深い、ねえ。ふーむ」

祐は四角いオイルライターを投げ上げては、キャッチする動作を繰り返した。それを目で追いながら喫煙衝動を堪える。

すると祐は、おもむろにポケットからくしゃくしゃになつたタバコを取り出し、一本差し出しながら言つた。

「我慢するなよ」

思わず、受け取つていた。あまりにも真剣な祐の瞳に驚きながら。タバコを手に呆然としていたら、祐が四角いオイルライターで先端に火を点けたので、慌ててそれを吸い込む。

ひさびさに吸つたメンソールは五臓六腑に染み渡つた。

祐はそれを満足そうに眺めながら言う。

「オレにできることはなにもないよ。おまえが思つてるほど、オレはなんでも知つてるわけじゃない」

「……そうか」

「真相を自分で確かめてみれば？」

「えっ？」

「だから、おまえをそうさせたものの正体がなんなのか、確かめてみるよ。おまえの目で、おまえ自身で、しっかりと真実を見るんだ」

「真実を見る……」

「そう。一番見たくないものを見るかもしれない。知りたくないことを知るかもしれない。それでも見ないよりはマシだ。わかるか？」

「わかる……ような、わからないような」

真相を確かめろという言葉は理解できた。どうやら、六木美夜子に直接会う必要があるようだ。

そして、彼女に手を見せてもらわなければならないらしい。

「今度は逃げるなよ。絶対に」

祐は那須川の目をまっすぐ見て言う。

「逃げないよ。もう僕には失うものなんてなにもないんだ」

「奇遇だなあ。オレも失うものなんてなにもないよ」

「おまえは昔からだろうが。僕はおまえのそんなところがうらやましかったよ。今も昔も」
それを聞いた祐は、ひどくおかしそうに微笑む。

祐の笑顔は十二年前と変わらず、純真無垢だった。



——これが、今から一年前の話。

目の前に座った六木美夜子に向かい話を終えた那須川は息を吐き、湯呑みを取り上げ一口呑んだ。煎茶はとつくに冷め、ぬるい液体が喉元をとおりすぎる。美夜子は、驚愕の表情で自らの口を押さえたまま固まっていた。

祐の助言に従い、こうして六木美夜子に会っている。祐の話聞いてから彼女に会うまで丸々一年を要した。仕事が忙しかったのもあるが、今一つ勇気が出せず、彼女にどう説明してアポを取ればいいのか悩みに悩んでいたからだ。

那須川は三十五歳になり、もう説明なんてなるようになれと開き直り、ようやく連絡を取った。

あの日、祐とは本当にそれだけ話して、すぐ別れた。お互いの近況報告もなかったし、次に会う約束もしなかった。いい年した大人が二人、酒も吞まずに別れるなぞ有り得ない話だが、祐らしいなどと思う。

祐は去り際に『これをおまえにやる』と言って、四角いオイルライターをくれた。お互い口に出していないけど、あの大喧嘩に関しては和解に近づいた気がしている。

まあ、いつかまた奴とは会うこともあるだろう。今はとにかく目の彼女の彼女に集中しなければ。

「えーっと、ちょっと待ってください。お話をもう一度整理してもよろしいですか？」

彼女は両手で頭を抱えながら言う。

「どうぞ」

那須川は言つて、湯呑みを茶托ちやたくにコトリと戻した。

「途中まではわかつたんです。私の手の写真を見てから、那須川さんがおかしくなり、私のことを調べて知った。けど、今のお友達おともだちのくだりが……」

「魚住祐？」

「そう。その魚住さんという方が十三年前、大学生だったとき、就活しようとした那須川さんに向けて言った言葉が……なんでしたっけ？」

「おまえのその臆病おくびょうさが、いつかおまえを殺す」

「そうですそれです。それがなぜ写真の件と繋がるのが、今いちわからないんです」

「おまえを殺すとは、僕が死ぬということですよね？」

「ええ。それはわかります」

「死ぬというのは、一つのたとえだと思つたんです。現実じやないに心肺停止状態になつて死亡する意味になるという意味です。つまり、これまでの僕が死んでしまつたかのような状態になるという意味です」

「ご自身が一度完全に死んだと感かんじるぐらい、そんなに変わつてしまつたんですか？ 写真を見る前と、見たあとで」

「そうです。写真を見て、祐の予言どおりになつたわけです」

那須川がはつきりうなずくと、美夜子は少し脅おびえた目をした。それでも美夜子は言葉を続ける。

「魚住さんとは喧嘩けんか別わかれしたけど、去年、那須川さんから連絡してひさしぶりに再会した。そのと

き私の手の写真を見せたら、魚住さんは手の持ち主に会つたほうがいいとアドバイスしたんですね？」

「かいつまんで言えば、そういうことです」

「事務所の応接室でお会いしたとき、手のモデルをしてるのかと聞かれましたが、那須川さん本当はご存知ごぞんじだつたんですね……」

「申し訳ない。あの場でいきなり知つているとも言えなくて」

「やっぱりなにか腑ふに落ちないというか、えーつと……」

美夜子は難しい顔をして考え込んでしまう。

「魚住さん、他になにか言つてませんでした？ 私の写真を見て、なぜ手の持ち主に会つたほうがいいなんて思つたんだろ」

「それは僕にはわからないんです。ちょっと変わった奴やつでして、たまにすごく鋭いことを言うんです。本人に自覚はないようですが……」

「そっかあ、なるほど。那須川さんもよくわかつていないから、私にもよくわからないんですね……」

「すみません。そういうことだと思ひます」

「今も夜、眠れないんですか？」

「ええ。妙な夢も見続けています。だんだんひどくなつてきているみたいで」

那須川は座卓ざたくに両肘りょうじしを載せて手を組み、今夜一番伝えたかつたことを口にした。

「僕が思うに、あなたの手はかなり特殊というか、ただの手ではない感じがするんです。五感を超えて訴えかけるなにかがある」

「そ、そうですか？」

「ただ綺麗とか美しいだけではない。なにか特殊な技法が使われている気がします。それが素人の僕には、なんなのかわからないけれど……」

「あの一那須川さん」

「はい？」

「他になにか伝えていない情報ってあります？ 私にちょっと言いづらいとか、社会的に障りがあるから言えないとか……」

彼女の言葉に、ドキリとした。

……まさか。僕の淫らな妄想に気づいているのか？

いや、そんなはずはない。妄想なんて他人に知られるはずがない。大丈夫だ。

「いえ、特に隠していることはありません。今、六木さんにお話しした内容がすべてです」

性的な情報は隠したが、そこまで正直に言う気はなかった。全部しゃべったら彼女はショックを受けるだろうし、セクハラで訴えられてもおかしくない。その辺は、きっちりわきまえて行動しなければならぬ。

「そうですか……」

彼女は少しがっかりしたように肩を落とす。

時刻は二十一時を過ぎた。



このとき、美夜子は密かにドキドキしていた。

——もしかして那須川さん、私のあの秘密に気づいているのかも……

実は美夜子には手に関してひた隠しにしている秘密があり、どうやら彼がそのことに勘づいている可能性があるのだ。

——あなたの手はかなり特殊というか、ただの手ではない感じがするんです。五感を超えて訴えかけるなにかがある。

那須川はそう言った。さらにこうも言った。

——ただ綺麗とか美しいだけではない。なにか特殊な技法が使われている気がします。

特殊な技法。

那須川の表現は言い得て妙だ。美夜子は確かに手の撮影のとき、ある特殊な技法を使っている。

それはパソコンのアプリケーションで写真を加工するとか、機材を使って光の当て方を工夫するとか、そういう種類のものではない。そういう加工はあらゆる写真に施されている。美夜子の使っている技法とは、もっと特殊なものだった。

最初はパーツモデルたちは皆、この技法を使っているんだと思い込んでいた。というより、この